

東京大学大学院 人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

2012年9月2日作成

派遣生 基本情報

氏名： 金沢友緒

所属： 東京大学大学院 スラヴ語スラヴ文学専門分野 博士課程 1年

派遣形態： 平成24年度 次世代人文社会学育成プログラム 夏学期 個人派遣

研究課題

近代ロシア文学の成立期におけるドイツ受容 —ライプツィヒのロシア人留学生—

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

【派遣国及び都市】

ドイツ ライプツィヒ

【利用した研究機関】

ライプツィヒ大学中央図書館

ドイツ国立図書館（ライプツィヒ館）

(2) 派遣期間

出発日 2012年8月1日

帰国日 2012年8月22日

総日数 22日間

研究成果

(1) 計画の概要

18世紀後半から19世紀初頭ロシアでは、ドイツ文学、文化の摂取が国家政策の下に推進されていた。多くの貴族青年たちをドイツへ留学させたこともそのひとつである。申請者はこの点に注目し、ロシアの知的エリートドイツ留学中の文学体験、及び帰国後の活動を調査する。今回は当時の主な留学先であったライプツィヒに赴き、留学生達が置かれて

いた文化環境を明らかにすべく、ドイツ国立図書館や大学図書館を中心に資料収集を試みる。なお、可能ならば現地の研究者との意見交換の機会も持ちたい。

(2) 実際に達成された成果

研究資料収集に関しては、当初予定していたライプツィヒ国立図書館及び大学図書館を活用し、1769～1774年にライプツィヒ大学に在籍していたロシア人留学生コゾダヴレフの動向を知るための研究書を閲覧し、複写することができた。特にドイツ研究者によって書かれた資料を調査することができたのは収穫であったといえるだろう。国立図書館に新しく併設された「ドイツ書籍・文字博物館」を見学できたことも、貴重な体験であった。なお、ライプツィヒ大学図書館では文献を利用するのみならず、同大学の学生と情報交換することができた。さらにライプツィヒは古書店が充実しており、図書館で入手できなかった古い文献を購入する機会も得られた。

計画当初は予定していなかったが、ライプツィヒ市南部に位置する聖アレクシ・ロシア記念教会を訪問し、東ドイツにおけるロシア人の居住の問題とその歴史的背景に触れる機会に恵まれた。この問題は、申請者のドイツ受容研究にとって新たな興味深い課題を提示してくれた。

以上のような調査を踏まえ、研究誌への投稿論文を1本完成し、現在もう1本を作成中である。

(3) 今後の展望

研究調査の対象はライプツィヒ大学におけるロシアの留学生であったが、今回得た資料から、留学生コゾダヴレフの動向をある程度把握することができた。彼の存在を通して、ゲーテを初めとするドイツ文学が18世紀末のロシアに持ち込まれた経緯の一端が明らかになったと思われる。

今後は他の留学生にも考察対象を広げるとともに、来年度はロシアに調査の場を移して、留学生達の帰国後の文化活動の実態を追跡したい。

今回の滞在では、18世紀当時のロシアの留学生が過ごしたライプツィヒの風景を共有することが出来た。彼等は新しい世界へ強い関心を抱き、ドイツに渡り、そしてロシアとの架け橋になった。こうした「国際感覚」は、現地に身を置くことなしには体験できなかったと思う。